

「イエスの食卓」

(ヨハネ21:1-14)

挽地茂男

2018.4.1 日本基督教団千歳丘教会

食事は私たちの日常にとって欠かすことのできない重要なものですが、日毎の食事にも困るような貧しい生活に生きる人もいます。以前にもお話ししたことがあります。チャールズ・チャップリン〔通称チャーリー・チャップリン〕という人は、幼い頃、極貧の中で暮らした人です。浮き沈みの激しい寄席芸人の夫婦の子どもとして生まれ、チャーリーが生まれて一年後に両親は離婚。母親が結婚前に、16歳で駆け落ちしたときに生んだ四歳年上の兄がいて、離婚後は母と子ども2人の計3人で暮らす母子家庭でした。歌芸人であった母親はやがて喉に異常をきたして歌えなくなります。歌声を失った歌芸人は、もちろん、売れなくなります。売れなくなると、生活はどん底になります。裁縫仕事で生計をやりくりしながらも、そのために借りたミシンの賃料が払えなくなると、ミシンまで賃貸を差し止められて、裁縫仕事

もできなくなり、一家は一日に食事を1回や2回抜くのがふつうになっていきます。子どもだけであれば孤児院でしょうが、母親もいるということで親子3人が「貧民院」に収容されます。貧民院での労働で少し小金を貯めて「貧民院」をでて、暮らしを初めてみても、相変わらずのどん底生活です。チャーリーはもう7歳になっていました。服は一目で女物とわかる女芸人の派手な古着を継ぎ合わせて造ったもので、靴は、女性もののハイヒールの踵を外して履いていたのです。周りの子どもたちからは、指をさされからかわれます。そんな貧しい母子家庭に聖書が慰めを与えるシーンがあります。後のチャップリンの「笑い」の原点となる暖かい灯が、彼の心に点った瞬間でした。母親は寄席芸人らしく、ふんだんに演技をまじえて、幼い息子に、聖書を読んでも聞かせます。その夜、11歳の兄は外の仕事に呼んでもらって、家には、母とチャーリーの2人だけでした。チャップリンの自伝の



一部をお読みします。

「母は窓を背にして坐りながら、例によって、あの読んでは演じてみせるという独特の方法で、新約聖書の物語、とりわけ貧者や子どもに対するキリストの慈愛の話をしてくれていた。わたしが病気だというので、この時ほど鮮やかな、そして感動的なキリストの姿を、わたしはまだ見たこともなければ聞いたこともない。寛容でおおらかなキリストの心、罪を犯して群衆に石で打たれようという女の話、母は真に迫って話してくれた。群衆に向かってキリストがいうのである。『汝らのうち罪なきもの、まず石にて打て』と。〔中略〕

そのうちに、語り続ける母の目に涙があふれた。磔刑用の十字架を運ぶのを手伝ったシモンに、イエスが心の底から感謝の眼差しを送った話や、イエスとともに磔にされた盗賊が、死の間際に悔い改めて赦しを求めたのに対して、イエスが『汝、今日より我とともにパラダイスにあらん』と答えられたという話などが、つぎつぎとつづいた。さらに十字架の上から母マリアを見下ろしながら、『女よ、視よ、汝の子なり』と語りかけ、

いよいよ死の苦痛にさいなまれながら、『わが神、わが神、なんぞ我を見捨てたまいし？』と叫ぶくんだりなどになると、母も私も声を上げて泣いていた。〔中略〕

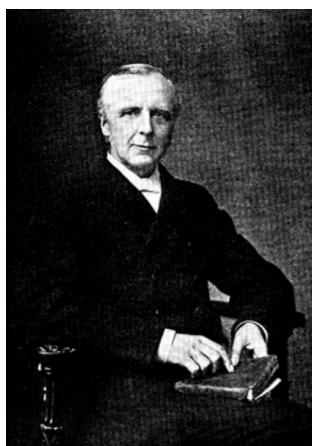
母の話に感動のあまり、わたしはその夜のうちにでも死んでイエスもとへ行ってしまいたいような気持ちになった。しかし、母はわたしよりも冷静だった。『イエス様はね、お前がまず生きて、この世の運命を全うすることをお望みなのだよ』と、説いて聞かせた。その夜、母はオークリー・ストロートの暗い地下の部屋で、生まれてはじめて知る暖かい灯をわたしの胸にともしてくれた。その灯と



“Smile!”

は、文学や演劇に最も偉大で豊かな主題を与え続けてきたもの、すなわち愛、憐れみ、そして人間の心だった」（自伝 P. 16-17）。もちろんこの灯がチャップリンの演劇・映画・音楽に点っている灯でもあるのです。チャップリンの作曲した“Smile”という曲があります〔「モダン・タイムス」の挿入曲〕。

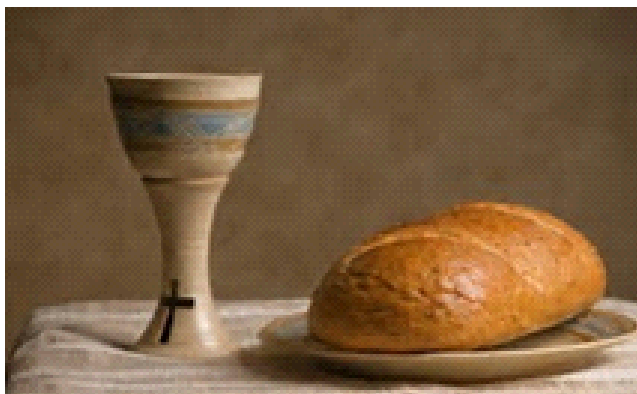
この曲には、人生の苦しみに鍛えられたチャップリンの希望が、穏やかな旋律によって表現されています。作曲者であるチャップリン



F.B. マイヤー(1899年頃)

の胸にともった「暖かい灯」を見るような思いが致します。チャップリン親子は、イギリスでは珍しく、バプテスト派の教会に通っていました。その教会の牧師が、F.B.マイヤーという牧師さんで、日本でも少し知られた牧師さんです。

今日皆さんとご一緒に読みました福音書の主イエスも、弟子たちの心に信仰の火を再び点します。弟子たちの心にともった、主イエスの愛と憐れみの灯、それが人の心を、そして弟子の心を取り戻させたのです。そして今日のお話の



中心には、主イエスの食卓があります。主イエスは食事を用意して、弟子たちを待っておられた、と書かれています。9節。「さて、陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。」

福音は、時には「焼き魚」の臭いがするのかも知れませんが。一種健全な日常が帰ってくる場所に、さりげない主なる神の配慮を見出すという形で福音は表現されることがあるのです。それは、長年の漁師としての経験から「収穫有り」、「取れる」と思って、漁には出たけれども、〔もちろん最後には主の言葉によって劇的な大漁を経験はするものの〕不毛な一夜の後の出来事でした。陸に上がると、暖かい「用意された、できたての食事」が待っていたのです。その夜の漁が、魚が捕れない「不漁」であったことは、弟子たちがこれから弟子として歩み出す新しい一歩を固める、強固にするきっかけとなりました。

しかしまず新しく「歩み出す」前に必要だったのは、疲れ切った弟子たちにまず必要だったのは食事なのです。「さあ、来て、朝の

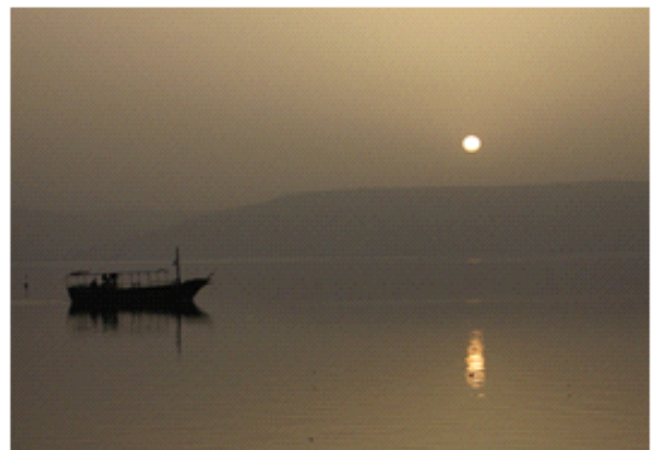


食事をしなさい」(21:12)。「さあ」と主は言われます。「さあ、来て食事をしなさい」と主は言われるのです。なぜなら、それが、不毛の漁に疲れ、意気消沈し、体と心に冷えを覚えた、今の弟子たちの体にとってまず必要なものだったからです。

今日の福音書の冒頭(2節)に名前の上がっている7人の弟子たちのうちのシモン・ペトロとゼベダイの子たちの最低3人はもと漁師だった人たちであります。彼らが漁に出ることを選んだのは、それが自分たちのやったことのある仕事だったからであります。彼らは先ずは手っ取り早く成功を予測できる仕事を選んだのです。しかしです。ご存知のように、彼らにはすでに宣教の使命が託されていたのです。一つ前のヨハネ福音書の20章21-22節にこう記されています。20:21 イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣

わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」20:22そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」と、弟子たちは復活顕現した主イエス・キリストから(1)平和(20:21)と(2)派遣の言葉(20:21)と(3)聖霊(20:22)を賜ります。弟子たちはもう宣教活動にいそしんでいてもいいはずなのです。わたしたちが今日読んでいるヨハネ21章は、その弟子たち最初の一步の手前に、「不毛の一夜」を挿入することによって、弟子たちの召命と、その召命をまっとうする力の源をもう一度確認させているのです。

ガリラヤ湖は彼らの生活の生業を支えてきた、彼らのテリトリー(悪い言葉を使えば縄張り)なのです。魚の漁については、他人のアドバイスは必要としない、彼らのキャリアーのすべてが詰まった



湖なのです。しかし弟子たちは、新しい歩みのために、まず一夜の不毛に終わったその湖から、岸に上がらなければなりません。自分の①**経験**を超えた、また自分の②**実績**を超えた、そしてまた自分の③**専門**を超えた、新しい岸に、主イエスの待つ岸に上がらねばならないのです。自分の領域から主の領域へ、新しい使命が待っている、主のおられる陸に、わたしたちは上がらなければなりません。そしてそこにこそ、新しい出来事の始まりがあったのです。

弟子たちは陸に上がりました。



そして「陸に上がってみると」炭火がおこしてあり。その上に魚がのせてあって、パンもあり(9節)、

すでに必要なものは備えてあった、と物語は教えるのです。**不毛の一夜は出会いの朝に変わったのです**。いやむしろ、イエス・キリストは「不毛」の中でこそ、私たちに語り、不毛の向こう側から、不毛の最中にわたしたちに出会われる方なのです。「舟の右側に網を打ちな

さい。そうすればとれるはずだ。」(21:6a)。弟子たちには、この言葉を耳にした時点では、まだ、その声の主が誰なのか分かりません。もう一晩中、彼らは右にも左にも網を打ったことでしょう。しかし彼らの漁



師としての経験から得た知識を超えた、また、その夜の直接的な不毛の経験を超えた言葉が語ります。つまり弟子たちの経験知からは出てこない言葉が語られます。

「舟の右側に網を打ちなさい。」

この言葉は、この場面において最大に重要な言葉です。これを十分に理解するためには、もう一つ説教が必要です。大切な点を少しかいつまみますと、それはまず先ほど言いましたように、(1)弟子たちがまだその声の主が、主イエスだと分かる前にかけてられている言葉だということ、(2)彼らの漁師の仕事の領域に係わる一つの提案でありながら、(3)まったく別の領域から出ている言葉なのであり、(4)最終的には、もう一度弟子たちのなかに、主イエスの存在

〔と権威〕を確認させる言葉だということです。主イエスは弟子たちに、今すぐ漁を止めて、宣教の任につきなさい、とは言わずに、彼らの仕事に一つの提案をしているのです。「舟の右側に網を打ちなさい。」しかしそれは、彼らより熟練した漁師の声ではありません。ガリラヤ湖周辺に漁業を営む、



ガリラヤ湖の“ピーター・フィッシュ”

漁師の古老が未熟な漁師たちに漁業のツボを教える声ではありません

ん。それは、むしろ漁師という職業とは別の領域から発せられる、彼らの職業的経験やその経験から得た知識や実績を超えた、全くの素人の、しかしある意味ですべてを知る玄人の、そしてその意味で権威ある者の言葉です。弟子たちの召命が全うされていくためには、もう一度この声の主の存在〔と権威〕が彼らの内に甦ることが必要なのです。しかしこの権威は、弟子たちの上に大上段から君臨する威圧的な権威として彼らに臨む権威ではなく、主イエスが、名もなき大工として出発しながら、その生涯をとおして愛によって勝ち

取った権威なのです。教師が今日からわたしがあなた方の先生です。先生の言うことは、ちゃんと聞きましょう、と言って子どもたちの信頼を勝ち取ることができるものではないのです。権威とは単に形式として存在するのではなく、内実として勝ち取られるものとして存在するのです。その権威が、弟子たちをまた人々を動かすのです。

「舟の右側に網を打ちなさい。」それは誰のものかは解らないけれども、何か懐かしさをおびた声だったのかも知れません。分かりませんが、弟子たちはその声に従います。その結果おびただしい数の魚が、網に入っているのを見たそのときです。「主だ」。一人の弟子が叫びます。「主だ」。「舟の右側に網を打ちなさい」という主の言葉にしたがって行動を起こしたそのときでした。「主だ」。あるいは、弟子たちがかつてイエス・キリストに従い始めた頃の、あの大漁の出来事（ルカ5:4-11）を思い出したのか、それが「主だ」と、気づく



のです。弟子たちの伝道者、宣教者、また主に仕える者としての歩みは、主を再確認したところから、真にスタートを切るのです。

彼らは主の待つ岸に上がります。しかし上がってみると、そこあるのは、寒風吹きすさぶ荒野のような冷たさではなく、温かい食事の備えが待っていたのです。主は、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」(21:12)と、「パンを取って弟子たちに与え…魚も同じように」(21:13)与えられるのです。

ローマの地下墓所(カタコンベ)から発見される多くのフレスコ画には、聖餐の象徴として〔5000人の



の供食物語からとられた〕パンと魚が描かれている、とわたしはよく申しますが、実は今日読みましたイエスの食事の物語も聖餐式に関係する**聖餐伝承**として流布していたものです。

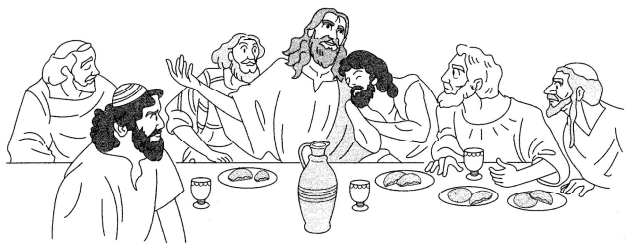
「イエスは…パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた」(21:13)。この箇所の記事は、「5000人の供食」の記事(ヨハネ6:1-15)を想起させます。「イエスはパンを取り、

感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた」と6章11節にはあります。食卓の中心に主イエス・キリストがいます。このような聖餐伝承は、教会の典礼においてとり行う聖餐式を「歴史化」して物語るのです。のちに聖餐伝承は、もう一つの重要な「最後の晩餐」の救済のテーマを吸収して、意味づけと形式が定式化されてまいります。しかし聖餐は元来、食事であったのです。教会はその食事を定まった形に定型化させ、後代に継承することによって、伝えられた聖書の言葉と共に、イエスの食卓を通して教会を支えてきたのです。教会は「食卓の共同体」として、「主の食卓」を中心に、「食卓に始まり食卓に帰る」共同体として存続してきたのです。食卓において、喜びを表し、食卓において慰めを与えられ、食卓において自分の使命を確認してきたのです。イエス・キリストは言われます。「さあ」と。



「さあ、来

て、…食事をしなさい」(21:12)とされます。「わたしのような罪深い、失敗だらけの人間は食卓に与ることはできません」とおっしゃるでしょうか。ペトロはこの食事の後「わたしの羊を飼いなさい」と再び主イエスの権威によってその使命を確認されるのです。そしてかつてのイエス・キリスト



の食卓には、徴税人や罪人がいたのです。その食卓を批判する人々に向かって、主は「**医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである**」(2:17)とされるのです。また「わたしのような汚れた女には共に食卓に与る資格はありません」とおっしゃるでしょうか。食卓についておられたイエスの足下には、涙でキリストの足をぬらし、自分の髪でそれをぬぐい、足に接吻してやまなかった、町の人たちから「罪の女」と後ろ指さされる女性がいたのです。そ

の女性を責めるように見下すファリサイ人の眼差しを尻目に、その女性に向かって、主は、「**あなたの罪は赦された**」…「**あなたの信仰があなたを救った**」(のです)。**安心して行きなさい**」(ルカ7:48-50)とされるのです。キリストは、重い皮膚病を患った〔かつて「ライ病人」と訳されていた〕そのシモンの家の食卓にさえおられるのです。主はわたしたちをも「**さあ**」と招かれるのです。「**さあ、来て……食事をしなさい**」と招いておられるのです。わたしたちも主の豊かな食卓の共同体の交わり(聖餐の食卓)に与ってまいりましょう。皆さんに、主の恵と平和がありますように。アーメン祈りましょう。

2020.4.12 日本基督教団千歳丘教会

